

木 本

きほん

宮
崎
編





めぐる木のめぐみ。

私たちは、古くから、山と向き合い、
木を、さまざまに活用してきました。

芽生え、生長し、やがて種を宿して
次の世代を育みながら、山々を緑で覆い潤していく。

そんないのちの営みに寄り添うことで、
私たちは、その土地その土地の伝統や文化、風土、
産業や日々の営みを育んできました。

木は再生可能で、
循環して活用できる希少な素材です。
伐って使った分、植えて育てれば、また使うことができます。

時間は、かかるのですが。

効率、スピード、均質…。
現代を生きる私たちが、知らず知らずの内に
身に付けてしまっている価値基準から少し離れて、
木のめぐみをめぐらせることを、今、改めて考えてみたいと思います。

これからの、本当の豊かさのために。



これまでのことを、
これからのために。

宮崎には、400年におよぶ杉づくりの歴史があります。

近年も、四半世紀にわたって

杉素材生産量日本一を達成してきました。

そうして今、思うことがあります。

これまで培ってきたことを、これからのために活かしていくことの大切さです。

森と木と人の未来のために

宮崎県の市町村を結ぶ道をたどると、
こんもりと山々をおおう
シイヤカシなどの照葉樹林*1にまぎって、
いたるところに杉の林の姿があります。
飢肥（おび）杉*2の美しい林です。

そして、そうした林のそこそこに、
樹齢の違いが織りなすモザイク模様が見られます。
循環型の杉づくりが続けられている証拠です。

育苗、造林、育林、製材の在り方。
木をより良く利活用する方法の探求。
木を使うことの意味、木と森と食との密接な関係。
森を守ることの大切さ、森と生きることで得られる豊かさの再発見。

杉素材生産量日本一を
四半世紀にわたって実現する過程で、
宮崎は、さまざまなことを考え、さまざまなことに挑み、
さまざまな行動をし、さまざまなことを学んできました。

その成果と蓄積すべてが、けっして宮崎だけに留まらないものです。

およそ樹齢 10 年

およそ樹齢 30 年



*1：照葉樹とは、葉の表面がつやつやと光って見える樹々のこと。温帯で雨の多い地域に育ちます。

*2：宮崎県で育成される杉。江戸時代に飢肥藩が植林活動をはじめたことから、その名があります。



約束する苗。

になる時、

ような材になるのか。

られているのか。

く、
あらゆる分野に向けられています。



林業技術センターが開発した独自の
コンテナシステム。片面波形の梱包材など
既存の資材を活用するアイデアが秀逸。



林田農園 林田喜昭さん・ご子息の尚幸さん
「森の名手・名人」の経験と技術、情熱は、
確実に次の世代へ。

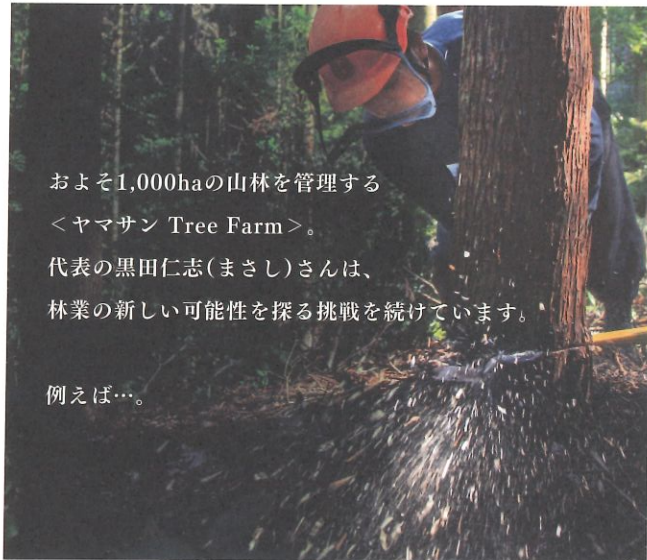






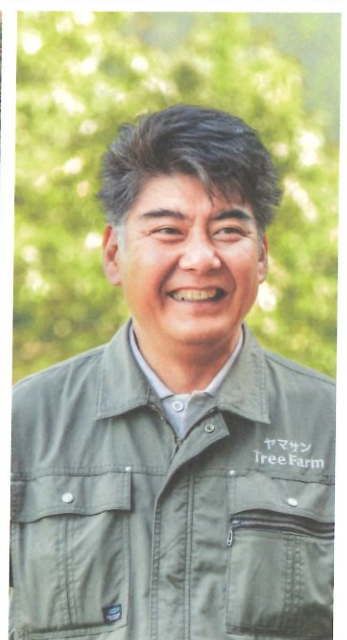
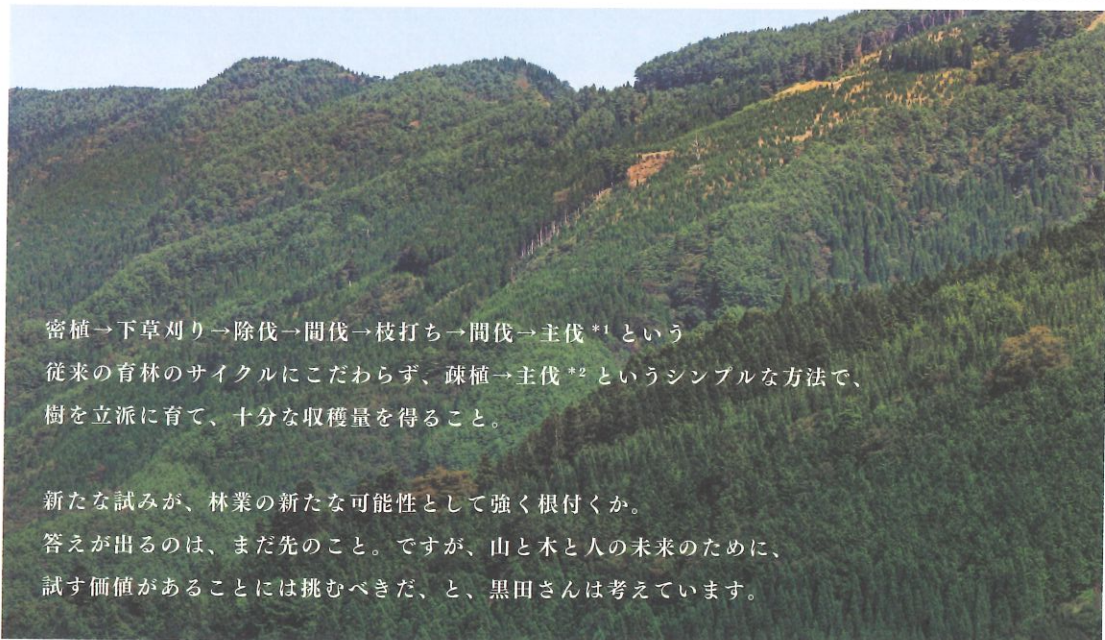
故郷に帰ることになって、林業に携わる道を選ぶ。
何がそうさせるのでしょうか。それはきっと、
大地と森が育む自然の中で育ったことで、心と身体に培われた何か。
故郷の山の将来を想い、故郷の山に向かう人が帰ってきています。
喜ばしいことに。

森林の郷(もりのさと)合同会社 工藤建樹さん
故郷の自然の変化を身をもって感じながら、樹を育て山を育てる人。



およそ1,000haの山林を管理する
〈ヤマサン Tree Farm〉。
代表の黒田仁志(まさし)さんは、
林業の新しい可能性を探る挑戦を続けています。

例えば…。



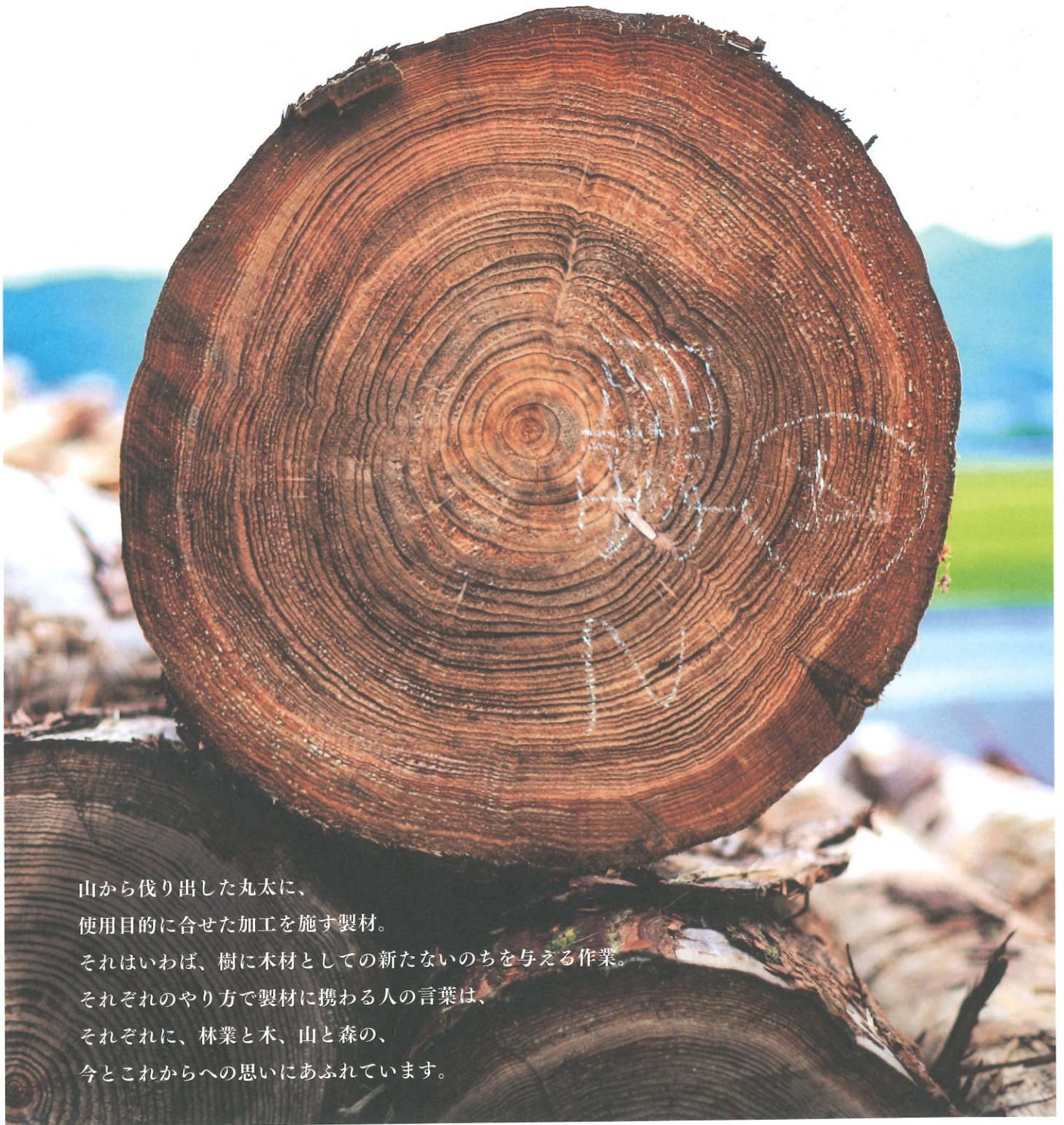
密植→下草刈り→除伐→間伐→枝打ち→間伐→主伐*1という
従来の育林のサイクルにこだわらず、疎植→主伐*2というシンプルな方法で、
樹を立派に育て、十分な収穫量を得ること。

新たな試みが、林業の新たな可能性として強く根付くか。
答えが出るのは、まだ先のこと。ですが、山と木と人の未来のために、
試す価値があることには挑むべきだ、と、黒田さんは考えています。

*1：これまで杉の育林は、密植＝およそ2m 間隔で苗木を植える→下草刈り＝苗木の生長を邪魔する草やツルを刈り払う→除伐＝生長や形の悪い樹を伐る→
間伐＝林が込み合ってきたら30～45% 程の木を間引く→主伐＝大きく育った樹を収穫する、というサイクルで行うのが一般的でした。でも黒田さんたちは……
*2：疎植＝あらかじめ収穫する本数の苗木を植える→下草刈りにも神経質にならない、という方法も可能なのではないかと考え、実験・実証を行っています。

ヤマサン Tree Farm 黒田仁志さん
独自の理論、おらかな発想、リーダーシップで、
地元の林業家をひびかる。

樹を、木として生かす。 一本、一本。



山から伐り出した丸太に、
使用目的に合せた加工を施す製材。
それはいわば、樹に木材としての新たないのちを与える作業。
それぞれのやり方で製材に携わる人の言葉は、
それぞれに、林業と木、山と森の、
今とこれからへの思いにあふれています。



都城木材 五十嵐可久さん



製材する側も、もっと山に目を向ける必要があります。
木材としての価値を高める工夫、
努力をして、得た利益を森に返していくことをしないと。

川の水と海の水が交わり、
多様な生命を育む
“汽水域・きすいいき”になぞらえて、
製材所は、山と人々をつなぐ
“汽水域・きもくいき”でありたい。
そう考える、都城木材の
五十嵐可久（よしひさ）さんの
言葉です。

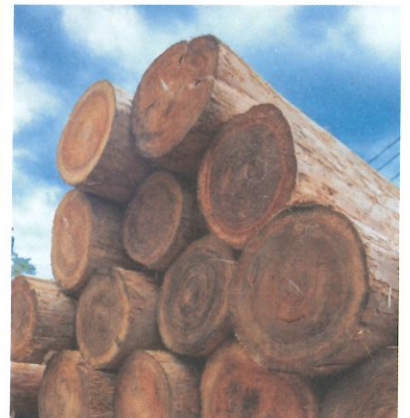


木材は奥が深いですよ。
今は何でも簡単に片付けがちでしょ。
ですが、もっと木を大切に扱って、
きちんと使ってあげることがしないとだめです。

木の素性を一目で見抜く、50年錬磨の目利き。
川口木材、川口和雄さんの言葉です。



川口木材 川口和雄さん・お嬢さんの廣池直美さん





諸塚村役場 矢房孝広さん



FSC®(森林管理協議会)の森林認証を得る。
それは、森を守る林業を続ける、
いわば企業モラルのひとつだと捉えています。

他に先駆け、村ぐるみでFSC認証を得た諸塚村の
企画課長兼地方創生担当課長、矢房孝広さんの言葉です。



木材というのは、なんと素晴らしい、なんと立派な資源なんだ。
そんなことを誇りに思えるような木材加工業でありたい。

木材を貴重な資源と捉え直して、余すことなく活かす。
最新の集成材製造のみならず、木くずを使った自家発電、燃え残った灰の再利用にも挑む
ウッドエナジー、吉田利生さんの言葉です。

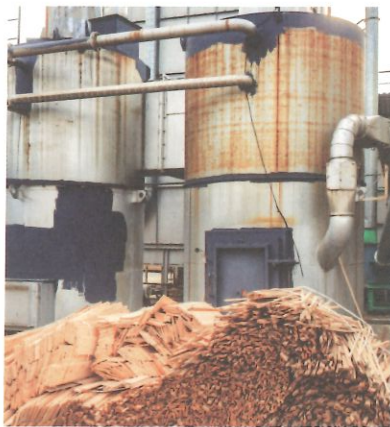


ウッドエナジー 吉田利生さん





サンケイ 川添恵一郎さん



「木は、できる限り燃やしたくはないです。
我が社でも、カッターくず、鉋（かんな）くず、
鋸（のこ）くず…、燃やします。木材乾燥用のボイラーで。
でも、燃やすしかないものしか燃やしません。
何かしらに使えるのなら、使う工夫をします。」

木を無駄にしないという思い、独自の発想と技術力、木材加工の製造プラントまで自社開発・
製造するノウハウで、従来にない集成材などを生み出す。サンケイ、川添恵一郎さんの言葉です。

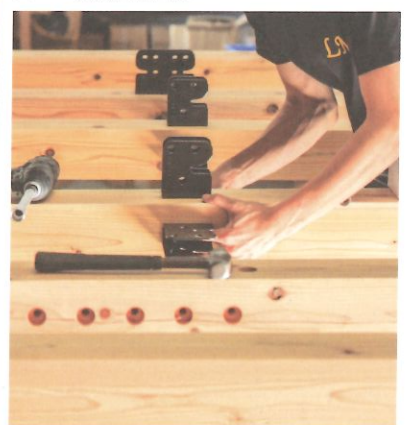


「山があって
木があることに感謝して、
私たちの仕事を通じて
先人の苦勞にむくいる方法が
もっとあるのではないかと。
そんなことを思いながら、いろいろなことを考えています。」

かつて大工さんが現場で行っていた建築資材の加工を、事前に工場で行う“プレカット”。
その精度と新たな技術を追及しながら、木材利用のさらなる可能性を探りつづける。
ランバー宮崎の、川上宰（おさむ）さんの言葉です。



ランバー宮崎 川上宰さん



とつても、木がきいています。

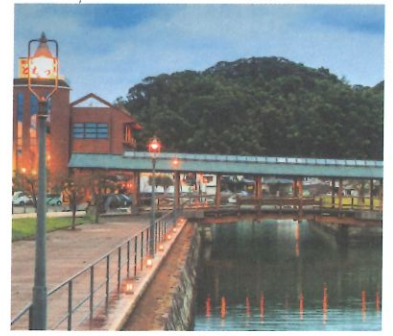
のりば
Track No.
1

BO104

KYUSHU RAILWAY COMPANY LIMITED EQUIPMENT

夢見橋

山から伐り出した杉を、港まで運ぶために設けられた日南市の「堀川運河」。その周辺の再整備にあたって架けられた木の橋です。素材はもちろん地元の飢肥杉。組み立て、接合に、釘などの金属をいっさい使っていないそうですから、おとろきです。



日向市駅

駅舎に地元の杉が使えないか。そんな思いが、さまざまな分野のいろいろな人たちとのつながりを生みました。そうして日向市駅は、市民の誇りになりました。



宮崎ブルーゲンビリア空港 保安検査場

空港の保安検査場。その目的を考えれば、冷たい印象の空間にもなりがち。でも、木を使ったら…。ずいぶん違った印象になりました。



あがた幼稚園

宮崎県日南市吾田にある〈あがた幼稚園〉。

その建物は、とてもユニークな考え方を基に造られています。

幼稚園を施設ではなく、子どもたちが

家族や周辺の人たちとともに“住む”場と捉える考え方です。

地元のスギをふんだんに使った、多様な空間の立体的なつらなり。

その豊かさは、そこに過ごす子どもたちの
生き活きとした表情に、はっきりと表れています。



写真左よりレモン設計室 河野秀親さん・あがた幼稚園 園長 伊豆元精一さん・
入中建設 入中英雄さん



良品計画

オフィスは、1日の1/3以上の時間を過ごす場所。

居心地の良い空間であるかどうかは、もっと大切にされるべきことのはずです。

そこで“感じ良い”くらしを提案し続ける良品計画は、

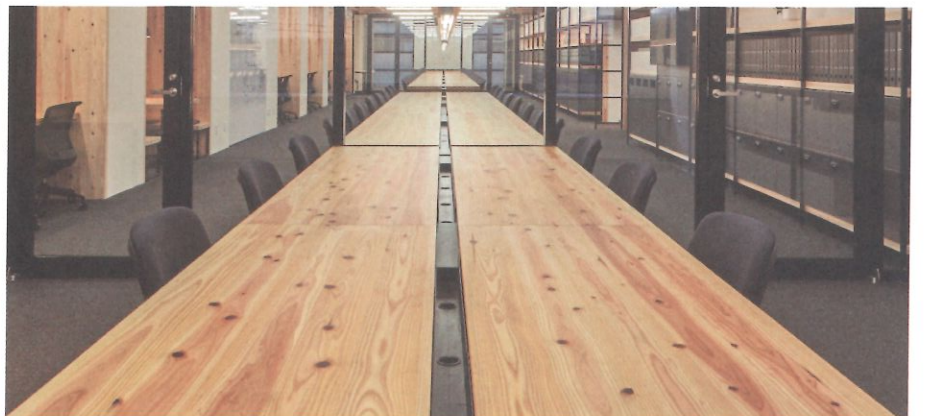
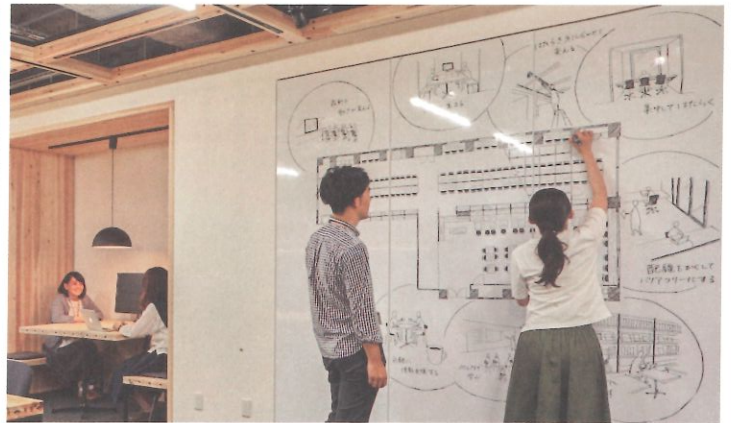
内田洋行とタッグを組んで、“日本の木のオフィス家具”を作ることにしました。

素材に選ばれたのは宮崎県産の杉材。そうしてその商品を、東京都豊島区にある本社に率先して導入しています。

自分たちで実際に使ってみることで新たな商品開発に活かす。

と同時に、日本の木を積極的に使うことで、地域の活性化を促していく。

木のめぐみのめぐりを良くする試みが、ここにもあります。



木の使い方への、
腕と頭の使い方。



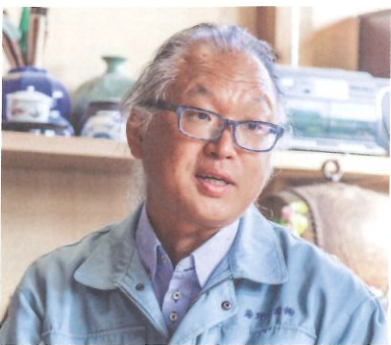
木を使おう。身近にたくさんある地元の杉を
しっかり活用しよう。とは言っても、言っているだけでは
活用の輪は、なかなか広がりません。
何を創る、どう作る。さまざまな発想と工夫が必要です。



やわらかさが持ち味の杉で家具をつくるには、
その特性をしっかりと見きわめた設計・デザインと
精緻を極めた加工技術が不可欠。



日南家具工芸社 池田誠宏さん
工学博士ならではの理論的視点で、
三次元造形法を駆使した家具作りに挑む。



海野建設 海野洋光さん
軽トラ屋台、くみたて和室などなど。
縦横な発想で、杉の活用法を開拓しつづける。



これ、
おもしろいね、すごいね、すてきだね、と、
だれもが思えるような斬新なアイデアも、
勝負のしどころです。



こんなの作って見たんですが。いかがでしょう。

宝物ともいえる地元・宮崎の杉を活用しよう。そのためにも、何ができるか考えてみよう。デザインしてみよう。作ってみよう。というワケで、“obisugi design”、“sugift”など、緻密な設計・技巧あり、楽しいアイデアありのスギモノを、いろいろと作ってみました。作ったのなら、ちゃんと紹介しないと。手に取って見てもらえるお店も用意しないと。で、オビスギ・ダラケノ・ギャラリー、略して<オビダラー>を作りました。とても元気です。



南那珂森林組合 山崎香代さん



オビダラー
日南市の鉄肥城内にある店内は、スギ愛、全開。



もっくわーく那須 那須幸雄さん
建具の技法を究める。



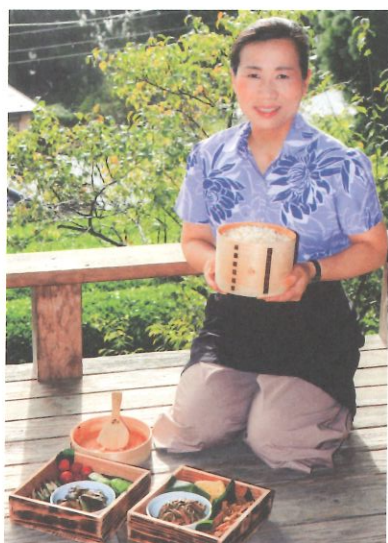
宮崎県東臼杵郡美郷町に工房を構える<もっくわーく那須>には、単純な構造のものから技巧の限りを要するものまで、さまざまな依頼が舞い込みます。そして何を作るにしても、理想を形にするための工夫と手間を惜しまないのが仕事の流儀。

工房を率いる那須幸雄さんには、伝え残したいものがあります。木の文化を損なわないための、技術と美意識です。

本体は、主にスギ、ヒノキ。留めの部分はカバザクラの樹皮で、
 接着剤等はいっさい使わない。50年にわたり林業に従事して
 木を知りつくす甲斐安正さんの手から生まれる“めんば”には、
 木のめぐみが、そっくりそのまま無垢のまま活かされています。



甲斐安正さん
 宮崎県伝統工芸士認定の職人。



諸塚村観光協会 堀川尚子さん
 甲斐安正さんのマネージャー的存在。

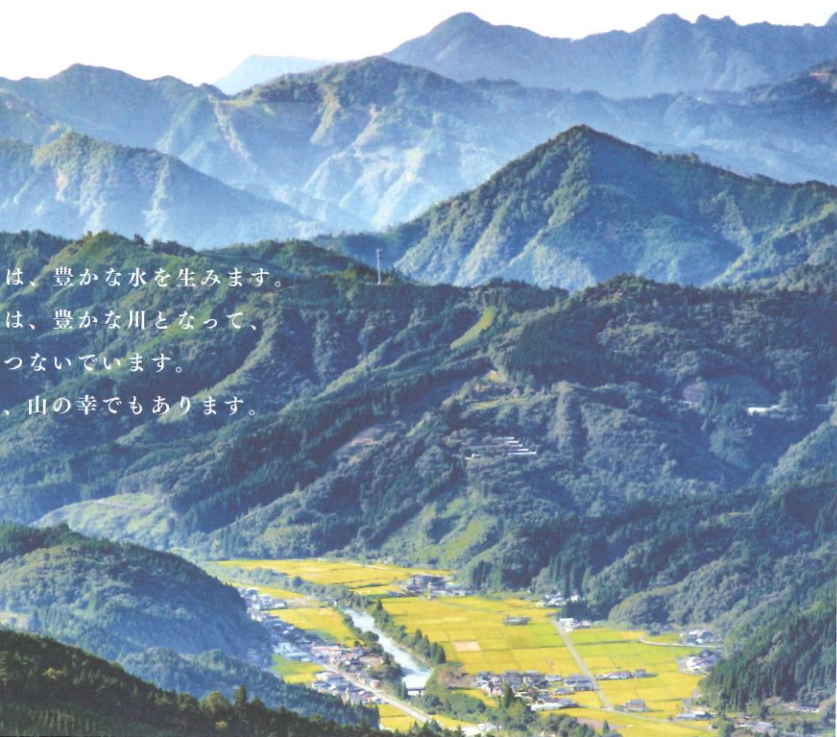


諸塚村に暮らす堀川尚子さんは、
 日々の生活の中に甲斐安正さんの“めんば”やお重を取り入れています。
 毎日のお弁当も、もちろん、めんば。
 めんばにすると、ごはんもおかずも確かにおいしくいただけるし、
 見た目にもぐんとおいしさが増す感じ。
 実際に使ってみて、その良さを知りつくして、堀川さんは、
 木のめぐみと共にある豊かさを発信しつづけています。

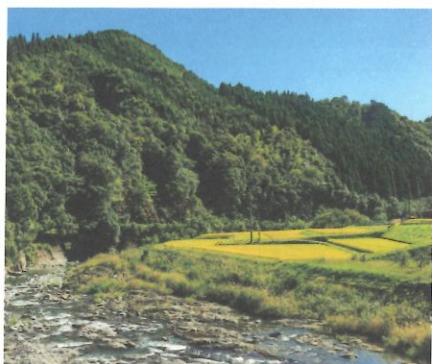
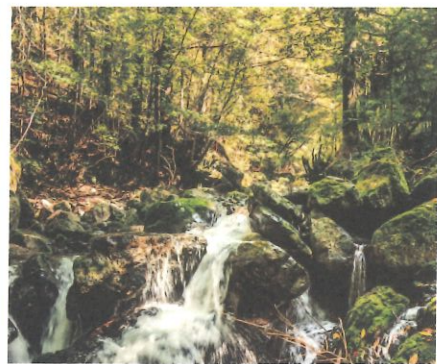


いただきます。

森にも感謝しながら。



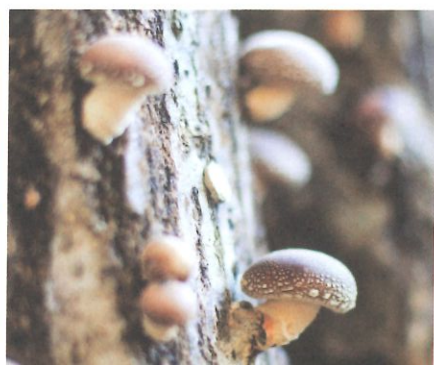
は、豊かな水を生みます。
は、豊かな川となって、
つないでいます。
、山の幸でもあります。



豊かな山は、豊かな土を生みます。
豊かな土は、豊かな水と力をあわせて、
力強い作物を育みます。



いただくものは
とをたどれば
のおかげです。





樽職人の不足等の理由で、今は醸造に使われていない木桶。復活の時は来るかもしれませんし、そう願う思いもあります。



長友味噌醤油醸造元 長友陽子さん。
百三十余年の歴史を持つ醤油・味噌の魅力、海外にも伝える。



私たちのような醸造元は、みなさん山を持っていました。

かつて、売った醤油や味噌の代金はお盆や年末にまとめて集めるのが習わしでした。では、醸造所を営む人たちは、日々の暮らしをどのようにまかなっていたのでしょうか。持ち山の木を売っていたのだそうです。今では商習慣も変わり、山の木との関わり方も様変わりしました。けれども、伝統の味を守る上で肝要な麴づくりには、今でもスギで作られた“もろふた(麴蓋)”が欠かせないといいます。

お茶をつくるのも、木をつくることから。

木のめぐみをいただきながら、木と共に生きる。
考えてみればそれは、お茶づくりにもいえることです。
同じ地域でも、山のどちら側なのかといった、ちょっとした条件の違いで、お茶の木が生きる力はまったく変わるのだそうです。
木は、木が育ちたい場所でこそ育てる。適地適木の原則は育林と同じです。



宮崎茶房 茶園四代目 宮崎亮(あきら)さん・写真右
手がけるお茶の味・香りに魅了されて全国から集まる若者を
快く迎え入れる

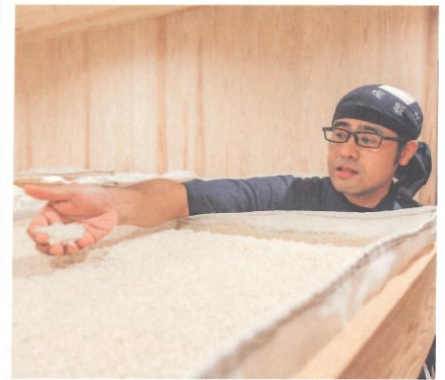


お茶の品質は、農林水産大臣賞や農林水産祭・天皇杯を受賞するなど折り紙付き。



ほとんどの焼酎蔵が使わない。なのに黒木本店の別蔵尾鈴山蒸溜所は、仕込みに杉の木桶を使っています。何故？

優れた断熱作用を持つ木桶には、発酵中の温度管理がしやすい利点があります。一方で、木桶は衛生管理が難しい。そのため細心の注意を払って発酵を見守る必要があるのですが、その分、仕事が丁寧になるし、多様な経験値の蓄積は技術の向上にもつながります。桶に住みつく乳酸菌などの働きで、お酒に+αの魅力函授けてくれる期待が持てるのも木だからこそ。それに木に囲まれているのは、作業環境としても理想的です。作業員に影響することは酒の品質にも影響しますから。なるほど。様々な理由があって木桶です！



黒木本店 吉山武伸さん（尾鈴山蒸溜所にて）



写真左より南郷漁協 総務課長 谷口正記さん・宮崎県南那珂農林振興局 堀江ひかりさん・南郷漁協 理事 橋口輝明さん・南郷漁協 総務部長 富山敏博さん



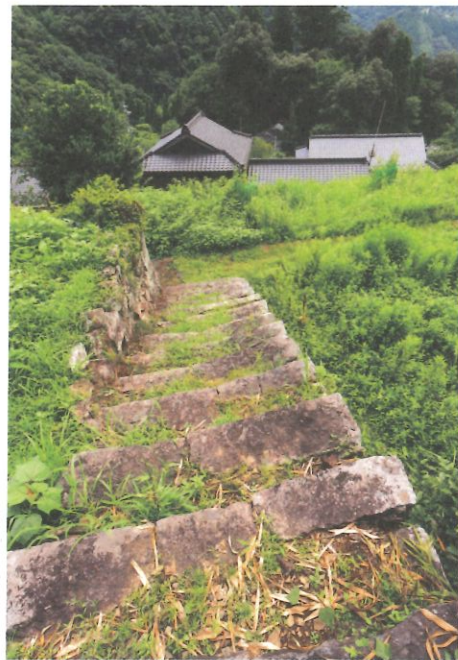
南郷町の港にそそぐ湯上川の上流域に広がる「漁民の森」。
 およそ3haの山肌、クスノキ、ヤマザクラ、クスギ、ケヤキなど
 7500本におよぶ樹が植えられ、下草刈りなどの手入れが続けられています。
 港で働き、漁に生きる人たちが、こうして森を育てるのは、
 森の豊かさが海を豊かにしてくれることを身をもって知っているから。
 1997年。最初の植樹が行われた時に読み上げられたコトバをご紹介します。

—海の恵みを受ける私たちは自然に感謝し、
 森と自然が一体となって海をよみがえらせるため、
 この地に漁民の森を育成する—



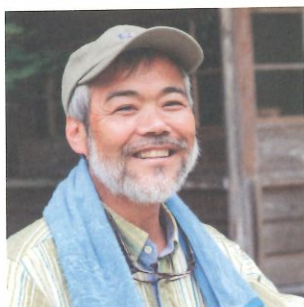
の暮らしと文化。

り添って日々の暮らしを営む。





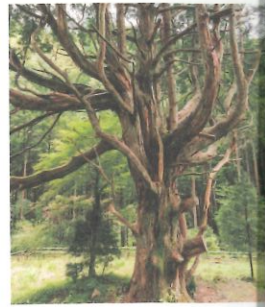
椎葉村・十根川伝統的建造物保存地区。伝建地区を守る会の会員でもある
尾前一日出さんのお話をうかがって、保存されているのが建造物だけではないことを知りました。
石垣と母屋・馬屋・倉からなる独特の建築様式が生み出す景観。それを守って行くことは、
暮らしの中に根付いた文化を、そして森と樹々をうやまう想いを守っていくことに他なりません。



椎葉村観光協会
尾前一日出（かずひで）さん



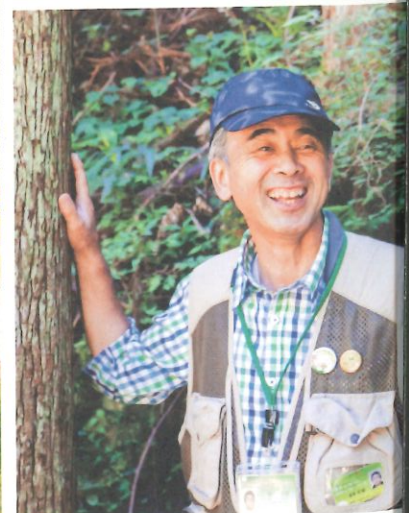
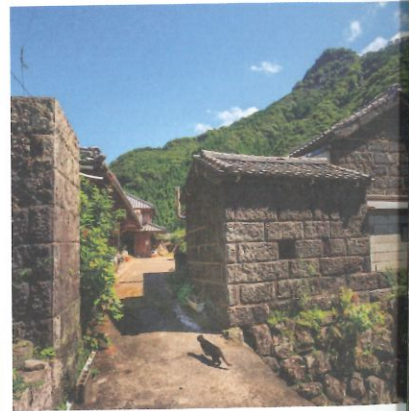
十根川神社境内の<八村杉>
およそ 54m の樹高を誇る地区の象徴。



大久保の大櫓
見る者を圧倒する姿。



森のめぐみ。樹のめぐみ。それは何も、
木材や山菜にかぎったものではありません。
森を訪ね樹々の合間を散策することで、
私たちは何かを感じ、得ることができます。
森林セラピーのガイドとして高見昭雄さんが教えてくれるのは、
森の豊かさのかけがえのなさ、森と共にある暮らしが作る
集落ごとの景観を守ることの大切さです。

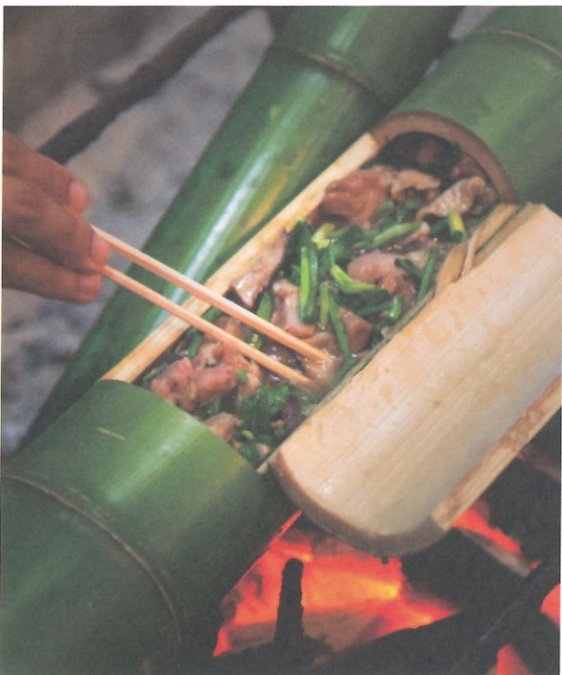


日之影町観光協会 高見昭雄さん
町の隅々を知る、癒しの森の案内人。

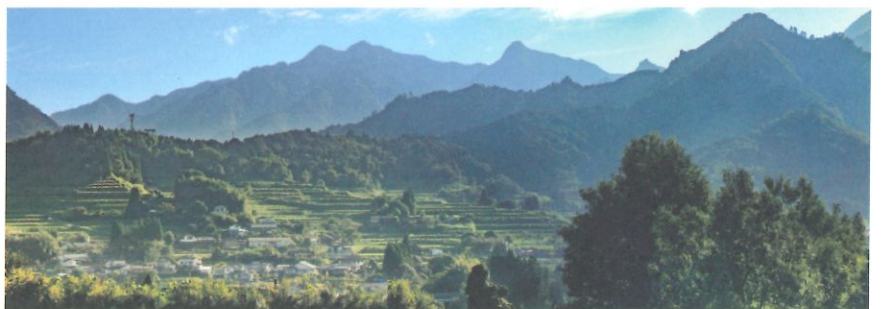


NPO法人高千穂アカデミー
写真左より佐藤翔平さん・小池美美さん・板倉哲男さん
それぞれに仕事を持ちながら、NPO活動で地域の魅力を発信。

一時は疲弊してしまった村を何とかしたいと、数十年にわたって奮闘してきた人がいます。
故郷に帰り、あるいは故郷を離れて住み着いて、この地の活性化に挑む若者たちがいます。
故郷、あるいは第二の故郷に想いを寄せるいろいろな人たちの行動が、神話の郷・高千穂
五ヶ村に活気を呼び込んでいます。



合同会社神楽館 佐藤光さん
五ヶ村の村おこしに欠かせない存在。



山のいたるところに
杉（あるいはヒノキ）を植えた時期がありました。

木材を得るために人が植えたのですから、
ちゃんと手入れをして立派に育てなければならぬのですが、
さまざまな理由から
放置される山も増えていきました。

植えたまま必要な整備もされなくなると、
林は鬱蒼とした暗いものになります。
光が入らない斜面には、
地面の土を抑える役割を果たす下草も生えません。

雨の度に表面の土が流されるようになると、
山はやせ、
地下水を育む力も衰え、
川も下流域の大地も海も、豊かさを失っていきます。

すべての豊かさは山の森にはじまり、
すべてはつながりを持っています。

使うために植えた木は、
きちんと使って、また植えて、また育てていく。
木の循環、木のめぐみのめぐりを良くしてはじめて、
山の豊かさは未来へ続いていきます。

山と森を想い続けていたいと思います。

A photograph of a dense forest covering a hillside. The trees are tall and thin, with a dark green color. The forest is very thick, and the trees are closely packed together. The lighting is bright, suggesting a sunny day. The overall scene is a lush, green landscape.

木のめぐりを、良くしよう。



SPECIAL THANKS

長友味噌醤油醸造元 / あがた幼稚園 / レモン設計室 / 入中建設
 南郷漁業協同組合 / 林田農園 / 住友林業 / もっわーく那須 / 耳川広域森林組合
 諸塚村観光協会 / 甲斐安正さん / 宮崎茶房 / 高千穂アカデミー / 高千穂町役場
 五ヶ村村おこしグループ / 森林の郷 / 日之影町観光協会 / 黒木本店 / 尾鈴山蒸留所
 ヤマサン Tree Farm & 黒田さんご家族 / 都城木材 / 川口木材 / 諸塚村役場
 ウッドエナジー / サンケイ / ランバー宮崎 / 九州旅客鉄道 / 宮崎空港ビル
 良品計画 / 日南家具工芸社 / 海野建設 / オビダラリー / 南那珂森林組合
 日南市役所 / 宮崎県南那珂農林振興局 / 宮崎県環境森林部 / 油津漁港
 宮崎県林業技術センター / 椎葉村観光協会 / 宮崎県緑の産業再生プロジェクト推進協議会
 ※順不同、敬称略

発行日 平成28年11月1日

発行 宮崎県 宮崎県宮崎市橋通東2-10-1

制作 株式会社 内田洋行 東京都中央区新川2-4-7

©本記事の無断転載、無断複製を禁じます。